

岸野報告へのコメント

村井 章介

岸野久氏の研究の特徴は、筆者のような素人の眼から見て、二つあるように思われる。

第一は、あらたに見出された欧文史料や、あるいは既知の史料でも独自の情報を含む写本を、紹介することを大きな柱とし、そうして得られた確かな基礎をふまえて、史料を深く読みなおし、史実に対する独自の解釈を導き出す点である。著書の多くの頁が、手書き本の影印を含む史料紹介に割かれていることに、その姿勢が見てとれる。

今回の報告でも、ザビエルの一五四九年一月五日付鹿児島発ゴアのイエズス会員宛書翰という、とびきり有名な史料をとりあげながら、ローマ・イエズス会文書館にある写本に基づいて、これまで日本を指すと解されてきた *estas partes* という言葉が複数形であることに注目して、「これらの地方」と訳し、それが日本・中国の両地を指すという新たな解釈を導いている。また、ザビエルがアジアにおける彼の活動期間を見通すなかで述べた「一〇年間」「数年間」「三年間」などの表現を厳密に解釈して、日本を指して以降の彼の「布教構想」を復元した点にも、同様の視点が生きている。

第二は、第一で指摘した手法から導かれることでもある（たとえば、*estas partes* が中国も含むという史料の読みなおしがそうである）が、ザビエル到来前後の日本とヨーロッパ勢力との関係を、それだけ抽象して論じるのではなく、アジアの他地域、とくにインド・中国とヨーロッパとの接触と対比しながら、解明しようとしている点である。従来の初期日欧関係史研究の視角が、「日欧の出会い」だけを歴史的な環境や文脈

から切り放して理解する「脱亜」的傾向に陥りがちだったのに対して、インド布教の経験や中国布教の構想との関連で日本布教を理解することにより、それを「アジア布教構想」の一環という普遍性のなかに位置づけるとともに、逆にヨーロッパ勢力にとって「日本」が占めた特殊性とは何だったかを考える筋道が開かれた。

この視角がとくに生かされているのが、異文化社会のなかにキリスト教が入り込もうとするときつねに必要とされた「媒介者」の解明においてである。インドでタミル語を習得してイエズス会のインド布教に転機をもたらした宣教師エンリケ・エンリケスに注目し、その活動の内容を日本布教における通訳アンジローやフェルナンデスと対比することにより、ザビエルの身近にあつて日本布教の手足となった人々が、初めて歴史的に理解できるようになった。この探究のなかでも、一五四八年一月二九日付アンジロー書翰の最良のテキストに基づく翻訳が、重要な役割を果たしている。

以上のような評価に基づいて、以下の二つの問いを發してみたい。

一つは、一六世紀なかばの東アジアにおけるポルトガル勢力の「主体性」をどの程度みつもるかである。鉄砲もキリスト教も中国式のジャンクに乗って列島にもたらされた、等の事実を根拠に、ポルトガル勢力は、「倭寇」と呼ばれた中国人中心の海上勢力が築いていた海上ルートに参加させてもらったにすぎない、といった論調が最近強い。種子島への鉄砲伝来の画期性を否定し、それ以前に倭寇によつて東南アジア式の鉄砲が伝えられていた、とする学説さえある。

しかし、一五一一年にポルトガルが武力でマラッカを獲得したことがアジア史の大きな転機であったことは否定できない。一五四九年六月二〇〜二二日マラッカ発ゴア宛ザビエル書翰によれば、彼の日本行きに際して、マラッカの長官は「頗る大きく、武装せる船を仕立て、これにポ

ルトガル人を乗せ、私達が能ふ限り確実に日本に渡航し得るやうに、計らって下さった」が、「そこへ行く適當な船が見つからなかった」ので、やむなく「海賊」というあだ名のチナ人の船を利用することになった、と記されている。ポルトガルは、主体的にザビエルを日本へ送り届けようという実力を持っていたことがわかる。実際、ザビエルが日本に注目するきっかけとなったアンジローの馬拉ッカ渡航は、鹿兒島に入港していたポルトガル商人ジヨルジェ・アルヴァレスの船によっていた。

『ザビエルと日本』に紹介されている「最初のザビエル伝」ペレス神父の報告によれば、ザビエルをチナ人に託した理由は、ポルトガル人が行くと、彼らが日本で悪事やキリスト教徒の掟に反する行為を行うであろうから、ザビエルらが善なるキリスト教的行為をしても、信頼を得られないだろう、と予想したからだという(三二八頁)。ここには、ポルトガルがチナ商人の海上活動に依存せざるを得なかったことと、彼らが「倭寇的勢力」一般に解消してしまえない平和攪乱分子であったことが、同時に語られている。

もう一つは、ザビエルのきわめて高い日本評価をうのみにしてよいかという問題である。先にふれた二五四九年一月五日付の書翰には、「日本人はそれまでヨーロッパ人が発見した国民のなかで最良であり、日本人より優れた人びとは異教徒の間にはみられないし、善良で悪意のない国民性を有し、財物よりも名誉を重んじ、武士は領主によく仕え、世俗の者が道理をよく弁えている」(五野井隆史『日本キリスト教史』三七頁の要約による)といった記述がある。ひんばんに引用されるこの評価は、日本人の耳にはきわめて快く、国粹主義にさえつながりかねない誘惑を秘めている。

ところが、岸野氏が明らかにしたように、ザビエルは、日本滞在を二年程度で足りあげて中国布教に着手する構想を来日前から抱いていたし、

一方で、インドにおけるエンリケスのような貴重な経験を日本布教に生かそうという視野も持っていた。また、離日後の書翰における日本評価は辛いものになっている。とすれば、前記のような手放しの礼賛の背後に、ゴアのイエズス会員、ひいてはイエズス会そのものに対して、これから本格化しようとする日本布教がきわめて有望なものであることを、最大限印象づけようとする政治的意図を、読みとることもできよう。

しかし、岸野報告の史料ⅣやⅧ(ともに一五五二年一月二九日付コーチン発ヨーロッパのイエズス会宛ザビエル書翰)には、中国布教の目的は、中国から伝わって日本で信じられている仏教諸宗派に対する不信を、日本人に抱かせることにある、といった記述がある。ここからは、日本における信者の獲得が最終的な目的であるようにも読める。史料2(一五五二年四月七日付ゴア発ヨーロッパ宛ザビエル書翰)には、三十四年中国で布教したのち一旦インドに戻り、パードレやイルマンを伴って再度赴き、中国または日本で生涯を終えたい、とあり、ザビエルにとってやはり日本は特別の対象だったのだろうか。

一六世紀史の重要な課題の一つは、「日欧の出会い」のみにスポットをあてるのではなく、アジア史の文脈のなかで、ヨーロッパとの接触の歴史的要義を、過大評価にも過小評価にも陥ることなく、しかもトータルに測定することにあると考える。岸野氏の仕事は、この課題についての重要な貢献であり、後進にとって不可欠の指針となるであろう。

質議応答

岸野

私の極めて狭い視点からのザビエル研究をアジア史の文脈に位置づけて評価し、コメントして下さったことに感謝したい。

コメントの第一の問いにある、一六世紀中頃、東アジアにおけるポルトガル勢力の主体性、画期性の評価について、鉄砲の伝来について即して述べたい。鉄砲の伝来はたとえそれがアジア産の鉄砲であるにせよ、その源がヨーロッパに発しているものであり、それを当のヨーロッパ人であるポルトガル人がもたらしたことは精神的、物質的な面での、ヨーロッパ・パワーの渡来を意味している。それ故、日本社会へのインパクトは倭寇によってもたらされるのとは比較にならないほどの大きさであったと考えられる。今まで余り注目されてなかったが、ポルトガル商人は貿易取り引きに来て、彼らの日常的な信心行為を通して、日本人にキリスト教を伝えていた。このような点もこれから説明する必要があると思う。

一五四九年一月五日付書翰における、ザビエルの日本人への極めて高い評価については、ザビエルがこれから行おうとする新布教地への希望と期待感、そして日本布教の有望さを関係者にアピールする必要性から日本人への評価は高くなっていると思われる。それ故、多少割り引く必要はあるかもしれないが、基本的にはザビエルの日本人への高評価は日本退去後も変わらなかったと考える。それはザビエル書翰によれば、宣教師と対話しうる「理性的」で、知的好奇心に富む国民性と日本社会の民度の高さであると思う。このことは日本を含めたアジア諸地域を扱った、ザビエル書翰及びイエズス会士のインド書翰を通読するとよく分かる。

生田滋(大東文化大学)

アジア全体におけるポルトガル人の活動の意味を考える場合、日本では余り知られていないことであるが、一五三〇年代がその転換点であると言える。セイロン島より東の海域におけるポルトガル領インドアの航海が大幅に自由化し、貿易のシステムが大きく変化した。マラッカのカピタンは中国南部、広州の近くまでの航海権を持っていたが、そこから先の航海が問題となる。ザビエルは、航海権を持っている人物により拒否されたので、やむを得ず中国船(ジャンク)を利用した。従って、ザビエルがアヴァンという人物のジャンクを利用したのは、特別な事例ではないと言えよう。

鉄砲の東アジア世界への広まりは、東アジアに定住したポルトガル人が自ら使用したり、傭兵などとして活躍したことによると理解すべきである。これは、ポルトガル王室やポルトガル領インドアの意志とは別物である。当時、山口は中国貿易の拠点であった。ザビエルは、布教が主目的であるとは言え、勘合船を求めて山口に赴いた面もあるのではないだろうか。

日本を離れてからのザビエルの行動には、一見したところ理解し難い点がある。これだけの計画と情報を持っていたとすれば、一度ゴアに戻ってから日本に向かい、日本で勘合貿易船に乗り込んで中国に向かう方法が考えられる。しかし、ザビエルは、直接上川島に向かっている。そして、上川島で中国上陸の許可を得られずに病死している。これは、ザビエルが東アジアにおけるポルトガルの貿易システムを理解していなかったか、もしくは容認できなかったからではないかと考えられる。ザビエルは、テルナテでモルッカのポルトガル人は腐敗していると述べているが、これは彼らが貿易を行っていたからである。ポルトガル人にしてみれば、貿易は当然のことであった。ゴア総督は、日本との貿易には

余り関心を示していない。当時のゴア総督の関心は、アラビア海、特にペルシヤ湾でイスラム教徒と戦って、貿易の拠点を確保することであった。ザビエルの構想は、ポルトガル王室のそれとは異なっていたと思われる。

ザビエルが鹿児島に到着したのは偶然だったのではない。当時の薩摩は、東南アジアから見れば巨大な貿易国家であり、鹿児島は日本の対外貿易の窓口であった。薩摩が北九州に攻め上っていくのは、長崎、博多などの貿易の拠点を占拠することで対外貿易を独占する意図によるものであった。その薩摩の北上と秀吉との戦争であったとも考えられるのである。その鹿児島への中継地点が種子島であり、いわゆる種子島への漂着は、確かに漂着であるとしても、種子島がジャンクの寄港地であったことに起因する。鉄砲については、種子島で国産化が始まったことが重要である。

五野井

次の二点を質問したい。

①ザビエルは、日本に渡航した時点では、日本から中国へ直接渡航しようという意志は持っていなかったのか？

②ザビエルが一度ゴアに戻ったのは、日本で勘合符を得ようという目論見が外れたためではないのか？

岸野

質問の順序に従って答えたい。

①日本から中国へ直接渡航する意志はなかったと思う。

②勘合符の案は、ザビエルが日本に来て三ヶ月未満で考えたことである。政治状況を正確に把握できていなかったのであろう。